

第5課 いと高き平和の君

【暗唱聖句】

「ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれた。ひとりの男の子がわたしたちに与えられた。権威が彼の肩にある。その名は、「驚くべき指導者、力ある神／永遠の父、平和の君」と唱えられる」イザヤ 9:5

【日曜日・ガリラヤの辱めが終わる】

「先にゼブルンの地、ナフタリの地は辱めを受けたが、後には、海沿いの道、ヨルダン川のかなた、異邦人のガリラヤは、栄光を受ける」イザヤ 8:23

ゼブルンの地とナフタリの地はいずれも北イスラエルの地。原語では、「彼が」という言葉が抜け落ちており、動詞は使役形なので、「彼は、(アッシリアによって) ～を辱める」「彼は(みどりごによって) ～に栄光を受けさせる」となる。訳されていない彼とは、主なる神を指している。先と後とでは、神によって状況が変わり、よくなるとの約束である。ガリラヤのことを、「異邦人のガリラヤ」と表現されているのは、イスラエルの民と移住してきた異邦人とが混血し、民族の純粋性が失われたからであろう。そのために、ユダヤ人はガリラヤ地方の人たちを軽蔑するようになる。しかし、イエス様が宣教を開始されたのはガリラヤからであった。弟子を選んだのも、ユダの他はみなこの地からであった。

「闇の中を歩む民は、大いなる光を見／死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた」 9:1

神の裁きにより暗黒の中を通らされることになるけれども、やがてそれは終わり、救い主イエス・キリストにより神の救いと栄光が輝くときがくるとの預言が繰り返される。そして、それは「彼らの負う軛、肩を打つ杖、虐げる者の鞭を…折ってくださった」(9:3) からであると語られている。

【月曜日・ひとりのみどりごが生まれた】

「ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれた。ひとりの男の子がわたしたちに与えられた。権威が彼の肩にある。その名は、「驚くべき指導者、力ある神／永遠の父、平和の君」と唱えられる」イザヤ 9:5

原文には「なぜなら」を意味する「キー」という言葉が最初にあり、2～5 節での祝福を受ける理由を説明している。すなわち、敵を滅ぼし、闇を光に変え、民を救い出すために「ひとりのみどりご」なる方が、救い主としてお生まれになるとの預言である。「生まれた」という動詞は、預言的完了形が使われている。「ひとりのみどりご」には、「驚くべき指導者」「力ある神」「永遠の父」「平和の君」の4つの称号が与えられている。ユダに実在した王のうち、誰一人としてこれらの名を現実にした王はいない。これはイエス様を現わしているのは明らか。

【火曜日・神の憤りの杖】

「しかしなお、主の怒りはやまず、御手は伸ばされたままだ」という言葉が9章の中に3度(11, 16, 20)と、10:4で繰り返されている。神の裁きは一度にやってくるのではなく、何度も段階的にやってきたということであり、これは彼らが愚かな行為を認め、悔い改める機会を神はお与えになったからである。しかし、「民は自分たちを打った方に立ち帰らず／万軍の主を求めようとしなかった」(9:12)。そして、「民はだれもかれも…なお誇り、驕る心に言った。「れんがが崩れるなら、切り石で家を築き、桑の木が倒されるなら、杉を代わりにしよう」(9:8, 9)。れんがよりも切り石、桑の木よりも杉のほうが優れている。つまり、主の裁きにあってもなお、イスラエルは頑なで、より一層高慢になるのであった。「民はすべて、神を無視する者で、悪を行い／どの口も不信心なことを語」(9:16) った。これがイスラエルの罪であり、裁きの理由だった。

「災いだ、わたしの怒りの鞭となるアッシリアは。彼はわたしの手にある憤りの杖だ」 10:5

神はご自分の憤りの杖としてアッシリアを用いられた。北イスラエルはアラムと連合し、アッシリアと戦ったが、

敗れ散る。しかし、アッシリアも同様に傲慢だった。アッシリアの王は、「自分の手の力によってわたしは行った。聡明なわたしは自分の知恵によって行った」(10:13)と言った。ゆえに主はイスラエルに対する裁きを行った後、バビロンによって「アッシリアの王の驕った心の結ぶ実、高ぶる目の輝きを罰せられた」(10:12)のだった。さて、このような状況の中で、イザヤは残りの民が帰ってくることを預言する。

「その日には、イスラエルの残りの者とヤコブの家の逃れた者とは、再び自分たちを撃った敵に頼ることなく、イスラエルの聖なる方、主に真実をもって頼る。残りの者が帰って来る。ヤコブの残りの者が、力ある神に。あなたの民イスラエルが海の砂のようであっても、そのうちの残りの者だけが帰って来る。滅びは定められ、正義がみなぎる」10:20~22

神の裁きは決して無差別な大虐殺などとは違う。神に頼る真実の民はいつの世もいて守られるのである。彼らは残りの民と呼ばれる。

【水曜日・根と枝は一つ】

「エッサイの株からひとつの芽が萌えいで、その根からひとつの若枝が育ち」11:1

10:33, 34にかけて、「万軍の主なる神は斧をもって、枝を切り落とされ」、切り株だけになってしまうことが描かれている。これはエルサレムの滅亡の描写であるが、その切り株から一つの芽は萌えいでると預言されている。エッサイとはダビデの父の名であり、そのダビデの家系から一つの芽、すなわちイエス・キリストがお生まれになるとの預言である。11:10の「エッサイの根」も、ダビデの子孫を現わしている。その若枝の上には、「主の霊がとどまる」(11:12)とある。「とどまる」には、「導く」「指導する」という意味がある。イエス様は主の霊に導かれて、父なる神の御心を行っていくということ。具体的には、「弱い人のために正当な裁きを行い／この地の貧しい人を公平に弁護する。その口の鞭をもって地を打つ」(11:4)。その結果、「狼は小羊と共に宿り」(11:6)とあるような、驚くべき平和がもたらされる。なお、11章にはキリストの初臨だけでなく再臨も描かれている。

【木曜日・わたしを慰められた】

「その日には、あなたは言うであろう。「主よ、わたしはあなたに感謝します。あなたはわたしに向かって怒りを燃やされたが／その怒りを翻し、わたしを慰められたからです。見よ、わたしを救われる神。わたしは信頼して、恐れない。主こそわたしの力、わたしの歌／わたしの救いとなってくださった。」12:1, 2

ここに主への感謝が述べられている。赦されたことへの感謝。救われたことへの感謝である。主を信頼するものは恐れることはない。主こそわたしの力、わたしの歌、わたしの救いとなってくださることがわかるからである。